

個人の内発的発展を重視した新たな人材育成事業に関する研究

—山形県置賜地方の「人と地域をつなぐ事業」を事例に—

○梅沢遥美・坂倉杏介（東京都市大学）

齋藤拓也（置賜広域行政事務組合）・前神有里（一般財団法人地域活性化センター）

Keyword: 人材育成、内発的発展、人と地域をつなぐ事業

【問題・目的・背景】

現在、日本では人口減少が進んでいる。特に地方部での減少が激しく、平成27年の国勢調査では東京、沖縄、神奈川、福岡などの8都県以外の39道府県で人口が減少していることが明らかになった。政府は第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を打ち出し、4つの基本目標と2つの横断的な目標を掲げた。横断的な目標の1つとして「多様な人材の活躍を推進する」ことをあげ、そのためには地域の実情に応じた内発的な発展につなげていくことが重要だとしている。しかし、政府や自治体が主導する事業によって、「多様な人材の活躍」につながる内発的な発展がただちに生じるとは考えにくい。

内発的発展論については近年様々な議論がある。日本における内発的発展論の提唱者とされる鶴見和子は、「それぞれの地域の生態系に適合し、地域の住民の生活の基本的必要と地域の文化の伝統に根ざして、地域の住民の協力によって、発展の方向と筋道をつくりだしていくという想像的な事業」（鶴見, 1999）と特徴づけている。すなわち、地域外からの働きかけではなく、地域内の担い手が地域固有の資源を生かすという考え方である。

その後、鶴見の考え方も変化し、個人の内面からあふれ出てくるものを実現する場として地域を捉えており、地域に生きる住民の成長の理論として内発的発展論を大きく変化させた（蜂屋, 2017）。このような流れから、住民の潜在する可能性をいかにして創発するかという問題意識のもと松原の「個人の内発的発展」への展開も見られる。個人の内発的発展とは、潜在していた可能性を自覚し、アイデンティティを形成することで人間的に発展、成長すること（松原, 2019）であり、ここでは個人の内的動機付けが尊重され、地域全体の振興という目標設定が外部として対置される。このように、内発的発展論には、地域の内外と個人の内外という二重の内発的発展論が存在するのである。（図1）

本研究では、同じく地域内を起点にしながらも地域全体の振興のために個人が協力する従来の地域活動と、そ

の動機を個人内に置く新たな内発的・地域活動を比較し、参加者や活動の多様性に違いが見られるかを明らかにするため、置賜広域行政事務組合が主催する「人と地域をつなぐ事業」を事例に分析を行う。

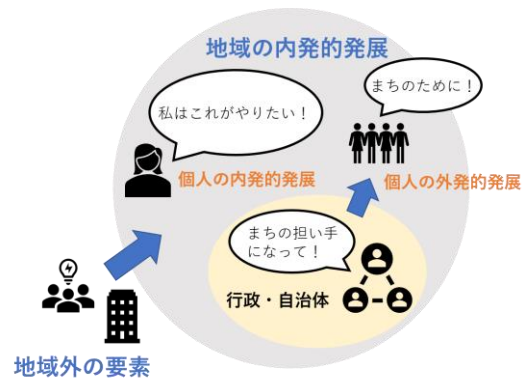


図1. 地域と個人の内発的発展

【研究方法・研究内容】

1. 人と地域をつなぐ事業の概要

山形県置賜地方の地域づくりの一環として置賜広域行政事務組合が実施する「人と地域をつなぐ事業」は、第5次置賜広域行政事務組合ふるさと市町村圏計画に基づいた人材育成事業であり、行政の呼びかけから始まった。置賜地方3市5町に暮らす受講者が人とつながる楽しさを知り、地域に関わるきっかけをつくることを目的とした講座で、2016年から実施されている。従来の地域おこしの型に合わせるのではなく、1人1人が持ち味を発揮して生きて、自分たちの望む未来の暮らしを実践していく内発型アプローチが重視されている。

年間のプログラムは、6月、8月、3月の3回の講座と、11月の東京への研修ツアーを軸に、期間中地域で様々な取り組みを進めるという形式である。講座内容は毎年少しずつ異なるが、自分のこれまでの人生を振り返り、他の参加者と共有する「エナジーカーブ」のワークから始まり、「私のウェルビーイングとは?」、「私たちはこの地域でどのように生きていきたいか?」といったテーマの対話を通じて、これからこのまちで何をしたいかを深めていく（図2）。講座としての課題は提示されないが、

期間中、受講者同士が協力して自分のやってみたいことにチャレンジし（図3）、小さなサロンやイベントなどが数多く行われ、中には独自の地域活動を始める人がいる。

講座以外の要素としては、東京の住民や学生との交流事業も定期的に行っている。東京都港区にあるゆるやかなつながりを生む場「芝の家」には毎年訪れ、芝の家のスタッフや地元の方と地域活動や人との関わり方などについて地域を超えた対話を重ねている。また、同じく港区のご近所イノベーション学校との共催による「24時間トークカフェ置賜」や、東京都市大学コミュニティマネジメント研究室の夏合宿との合同講座も行われている。

「24時間トークカフェ置賜」では、人と地域をつなぐ事業の受講生が、それまで交流のなかった港区の方々に自分たちの活動を発表する機会や、山形名物の芋煮を参加者と一緒に作って食べながらそれぞれのまちについて話す機会があり、「遠くにいるご近所さん」のような関係性を築いた（図4）。2019年の東京都市大学の夏合宿との合同事業では、米沢市信夫町の町内会で住民同士の関わりが少なくなったという問題意識のもと、東京の学生の力を借りて、町内の空き地を利用した1日限りの「信夫町ガーデンフェスティバル」を実施した。この取り組みの結果、その後も町内の集まりが増えるなど、受講者だけでなく、多方面に影響を与えた講座となった。（図5）



図2. 講座の様子



図3. 受講者の自主イベントの様子



図4. 24時間トークカフェ置賜の様子



図5. 信夫町ガーデンフェスティバルの様子

これまで背景や年齢、職業も違う59名が受講し、受講者たちは、いくつもの講義と実践、また外部との交流で成長し、自らの動機付けやアイデアで様々な変化を起こしてきた。これらのことから、人と地域をつなぐ事業は、従来とは違う「個人の内発的発展」に基づいた地域活動が生まれる契機になっていると考えられる。

2. 研究方法

本研究では、1) 置賜地方で実施されている他の人材育成事業やまちづくり団体支援事業との比較から「人と地域をつなぐ事業」の特徴を整理し、2) こうした個人的内発型地域活動の場を通じて、参加者がどのように自己や地域への意識、地域内での関係性や活動を変化させたかについてライフストーリー調査によってそのプロセスの分析を行う。

1) 置賜地方の人材育成事業との比較調査

人と地域をつなぐ事業の特徴を、置賜内にある34のまちづくりに関する取り組みや人材育成事業と、活動の動機、活動目的、参加者の点から比較し、明らかにする。

2) 参加者のライフストーリー調査

人と地域をつなぐ事業の参加者へのライフストーリーインタビュー調査では、以下の項目での半構造化インタビューを実施する。

①参加者の背景 ②参加の動機 ③内発的な変化（自己開示や自己受容の視点） ④外発的な要因 ⑤変化に向けた困難 ⑥主体的な行動選択 ⑦人生観の変化

【研究・調査・分析結果】

調査結果から、「人と地域をつなぐ事業」で起こっている内発的な変化には、内的動機付けに基づく地域内外の多様な要素とプロセスが存在することが分かった。

1. 他団体との比較から分かる「人と地域をつなぐ事業」の特徴

置賜地方には「人と地域をつなぐ事業」を入れて10の県や市町が主催する地域づくり講座と、24の地域づくりに関する取り組みがある。それらを、1、活動動機、2、活動目的、3、参加者の軸で整理し、「人と地域をつなぐ事業」の特徴を考察する。

1) 活動動機

活動はどのようにして始まったかの活動動機は大きく分けて5つに分類された。（表1）

人と地域をつなぐ事業はこの中だと、2つ目の「行政の呼びかけから」に分類される。これは34団体中17団体が分類されるものであるが、人と地域をつなぐ事業は始まりこそ動機付けは行政からであったが、活動を進める中で参加者自らが考えて講座に参加し、個人の動機や思いから様々な企画が始まっている点では、同じ行政からの呼びかけで始まった団体との違いと言える。

表1. 活動動機と活動団体の例

活動動機	活動団体の例
まちの改革から	NPO 法人きらりよしじまネットワーク
行政の呼びかけから	かわにし塾わげしゅ、 人と地域をつなぐ事業
青年会議所の加入から	一般社団法人南陽青年会議所
住民の想いから	夢プロジェクト「竹あかり×ゆき×祈り」
その他	BeHereNow 企画

2) 活動目的

活動団体の目的は大きく分けて8つに分類された(表2)。人と地域をつなぐ事業は1～7に所属しない、8つ目であり、そもそもの明確な目的は存在していない。

1～7の目的は、「まちのため」「住民のため」のものであり、人と地域をつなぐ事業は「自分のため」の活動であるという点が最も他の団体とは違う点である。受講者は、人とつながる楽しさを知り、地域に関わるきっかけをつくっているため、それぞれ参加目的が違っていても、参加できる環境もあるといえる。

表2. 活動目的と活動団体の例

目的	活動団体の例
住民に地域に愛着を持ってもらう	小玉川青年団イチコロ
まちの魅力をPRする	スパイクファミリー
学生とまちをつなぐ	アットストリート
誰もが住みやすいまちをつくる	Gratitude
地域づくりの担い手を育成	米沢市「まちづくり人材養成講座」
人と人、地域と地域をつなげる	HOPE
自分の学びを最大化する	高畠町「熱中小学校」
(明確なものはないが) 自分と地域をつなげる	人と地域をつなぐ事業

3) 参加者

10の地域づくり講座の参加対象者を比較すると、各町から推薦された人や行政の職員、地域の若い担い手となる人向けの講座が4団体、まちを元気にしたい、地域づくりに興味がある住民向けの講座も、人と地域をつなぐ事業合わせて4団体、最先端の学びを受けたい人向け、

市内の若者向けの講座がそれぞれ1団体ずつであった。しかし、人と地域をつなぐ事業は、住民向け講座のなかでも、より多様な年齢、性別、職業の方が受講しており、受講者同士が影響しあっていることも受講者の成長の一つであるといえる。(図6)

人と地域をつなぐ事業参加者の職業(参加当時)

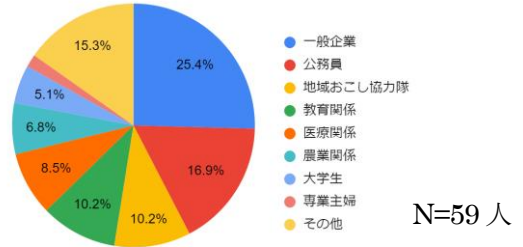


図6. 受講者の職業

以上の3つの軸から人と地域をつなぐ事業には、はじめは外発的な動機付けではあったが、明確な目的を決めず、年齢も性別も職業も違う受講者が集まり、それぞれ多様な想いをもって参加をしているため、それによりお互いを影響しあっている、という特徴がある。

2. 参加者へのインタビュー調査から参加者の変化のプロセスを分析

これまで人と地域をつなぐ事業に参加した人は59人であり、今でも関わりのある方に絞り、半構造化インタビューを行った。今回は講座の参加がきっかけとなって主体的な活動を始めたAさん(1期生・女性)とBさん(4期生・女性)のインタビュー結果から、講座の中でどのような変化が起こっていたのかを分析する。

①参加者の背景

Aさんは、元々所属している団体が複数あり、考え方の違いや内部の人間関係に苦労していた。また、肩書が重いことも疲れの原因であると語っていた。

②参加の動機

Aさんの人と地域をつなぐ事業に参加したいと思ったきっかけは「まちづくりに疲れた人へ」と書かれたチラシに共感したことである。また、目的がなくていいことや自分にも参加できるかもしれないという自己肯定や発見、そして東京に行ける、というインセンティブも動機として挙げられている。

③内発的な変化(自己開示や自己受容の視点)

Aさんは多様な年代と話すことで、幅広い視野が生まれること、縛られた雰囲気ではなく、のびのびした雰囲気

が自分は好きだということに気づいた。また、自分が楽しめればいいと思うようになった。

④外発的な要因

Aさんは、港区の芝の家や世田谷区の尾山台との交流事業に参加した。特に港区では、柔らかい雰囲気が仲間を作りやすいこと、決められた成果が出なくても自分のやりたいことに努めてみることで、おのずと結果は見えてくること、いろんな人に会ってもっと話を聞いて新しい感覚を芽生えさせたいと思うことに気づいた。

⑤変化に向けた困難

Aさんは、人と地域をつなぐ事業に参加する前に、すでに担い手として複数の団体に所属しており、疲れていた。そのため事業での苦労はなく、楽しんで参加していた。

⑥主体的な行動選択

Aさんは人と地域をつなぐ事業を通して、自分は向上心よりも興味で動くこと、そして周囲が興味のままに行動していることから影響され、成果を出さなければいけないという思い込みの壁を乗り越えたことがあった。

⑦人生観の変化

Aさんは人と地域をつなぐ事業を通して、限られた時期で一定の成果を出すことだけではなく、そうではない場所もあり、その居心地がよいことや、参加目的は特になかったが、自分にできることを考えるようになったこと、みんなで会ったときに癒しになる人になりたい、と思うようになったことの3つが人生観の変化として挙げられていた。

以上のインタビューのサマリーから、Aさんの変化を(図7)のストーリーラインに整理した。自分の理想に気づき、苦労していた壁を乗り越えて自分にできることを考えるようになったというAさんから生まれた内発的な変化は、周りの参加者や、地域外の交流した人々の行動や思いが刺激となって生まれていることが分かった。

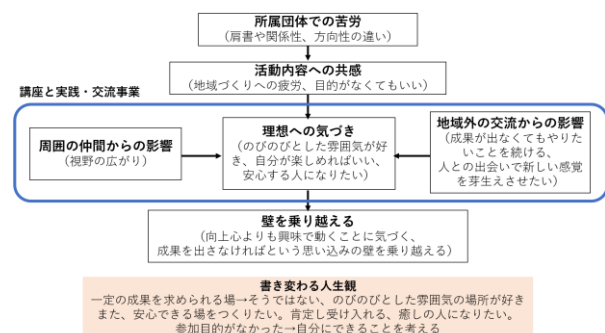


図7. Aさんのストーリーライン

また、同じ項目での質問をしたBさんは、東京から米沢市に嫁いできてしばらくは家庭中心の生活であったが、

余裕が出てきた時に外に意識を向けたいといった、Aさんとは別の動機から始まり、講座の中の自分の人生を振り返るワークの中で、特に米沢市にきた時期は、家庭中心で自分に軸をおいて考えていなかったことが分かったという。そのため、BさんはAさんのように、自分以外から影響を受けて自分の思いが生まれたこととは違い、外からの影響ではなく、自分で自分を客観視する機会を活用したことで考え方が自分軸となり、その後も自分のやりたかったことに向けて前向きに進んでいる、という変化のプロセスをたどっていた。

このように、人財育成事業ではあるが、他の団体とは違い、明確な目的を決めず、多種多様な所属の参加者が集まる人と地域をつなぐ事業では、背景や動機の違う参加者が、お互いの思いを共有することや、自分の人生を振り返ること、他者の行動や思いを知ることで、個人の内発的な変化が起こっていることが明らかになった。

【考察・今後の展開】

調査結果から、人と地域をつなぐ事業のように、きっかけは行政からの呼びかけでも、個人の内発的な動機付けからなる地域活動からは、多様な人材の活躍を引き出す可能性があると考えられる。また、個人の内発的な変化を生み出すプロセスには、行動や思いの動機は自分自身だが、少なからず他の受講者からの影響もあるため、内発的な変化のためには自分だけの力ではなく、地域内の他者や地域外のまちや人との関係性が重要であることも考察される。人と地域をつなぐ事業は毎年受講者がいるため、今後も継続して受講者の変化を追い、今後はさらに、このプロセスによる地域活動が、地域社会にどのような影響を与えているかを検証していく必要がある。

【引用・参考文献】

- ・総務省, 2015, 平成27年国勢調査人口等基本集計結果
- ・まち・ひと・しごと創生本部, 2019年, 第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」
- ・鶴見和子, 1999年, 鶴見和子曼荼羅 IX—内発的発展論によるパラダイム転換, 藤原書店
- ・蜂屋大八, 2017年, 鶴見和子の内発的発展論における地域づくり主体形成の検討, 茗溪社会教育研究, 8巻, 15-28
- ・松原明美, 2019年, 内発的イノベーションによる地域づくり論序説, 同志社政策科学研究, 21巻, 1号, 107-120
- ・置賜広域行政事務組合, 2019年, 平成30年度人と地域をつなぐ事業報告書